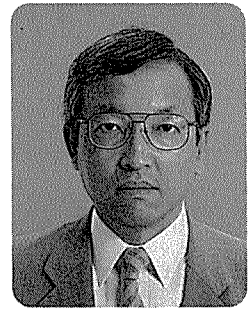


「あたりまえ」の今



生馬 道紹*

最近、いろいろな集団がマスコミを賑わしている。それは、カルトであったり、原子力関連であったり、警察であったりと、広い範囲にわたっている。報道が切り出す集団のあり様は、額面どおりには受け取れないかも知れないが、私たちが驚かすに十分なものである。これらのことが世紀末によるものであれば、あと1年で問題は解決することになるが、そうはならないであろう。

私たちが驚いたり違和感を抱くのは、これらの集団のあり様や行動が、私たちが「あたりまえ」と思っていることと異なっているからである。「あたりまえ」とは、共有化された認識であり、常識と言ってもよい。お互いの顔を見れば考えていることが大体理解できるという何か＝「あたりまえ」が、最近まで確かに広く日本人の間に存在していたと思うのだが、今どうなっているのだろうか。

私たちが驚かしていることは、実はそれぞれの集団では「あたりまえ」のことではなかったのではないだろうか。それは組織的にラインの人々が関与していたことから明らかである。「あたりまえ」がいつの間にか集団独自の「あたりまえ」となり、私たちが驚かすまでに変質して、私たちの前に提示されたのである。「あたりまえ」の分化である。同じ認識をもつ集団の範囲が狭くなってきているか、同じ認識の範囲が狭くなってきているのである。このことは、どの集団でもそれぞれの「あたりまえ」をすでにもっていることを、暗示しているのかも知れない。

「あたりまえ」の変質は、集団によるものだけではない。国際化も「あたりまえ」の変質を促していく。グローバルスタンダードやISOシリーズ等がその例である。国際化とは、そもそも異文化の人間と相互の文化を尊重しながら付き合うことである。そこでは、共通の認識は存在しないか、共通の認識がある

としてもその中身をよく吟味して付き合う必要がある。異文化との交流では、当然異文化による影響を受ける。その程度は、交流の度合いによるものである。この度合いによっても、「あたりまえ」の分化は進む。

また、専門分野の高度化も共通の認識をもつことを困難にしている。たとえば、プレストレストコンクリートの分野でも、橋梁、タンク、建築等の全般にわたって理解する能力をもつのは容易なことではない。専門に特化すればするほど、他の分野に疎くなるということもある。

さらに、デジタルに関する知識差も、「あたりまえ」の分化を促す方向に働くであろう。

このように、「あたりまえ」が細分化されたり、その範囲が狭くなっている現状に、どう対処していけばいいのだろうか。今までどおりを維持すべきだろうか。しかし、「あたりまえ」の存在そのものが怪しくなっている今では、それは不可能と思う。懐かしむことはかまわないが、時代に逆行するわけにはいかない。それぞれの「あたりまえ」が異なっていることを前提として、仕事の進め方を考えていく以外にない。異なる「あたりまえ」は、もう「あたりまえ」とは言えないのかもしれないが。仕事を進めていくうえで、各自の「あたりまえ」の相違を相互に確認する作業が必要となる。つまり「あたりまえ」のすり合わせである。相互の理解を図るためには、自分の「あたりまえ」を分かりやすい言葉で表現することが重要である。

さて、設計屋の「あたりまえ」と施工屋の「あたりまえ」は、今どの程度同じなのでしょう。私の「あたりまえ」とあなたの「あたりまえ」は、どの程度同じなのでしょう。

* Michitsugu IKUMA：本協会 前理事，日本鉄道建設公団 札幌工事事務所